

## ■視覚支援学校における実践事例

# 活用の幅を広げよう —盲学校での試み

東京都立久我山青光学園  
視覚障害教育部門  
名取 恵津子

### 障害の実態に応じたさまざまな活用の可能性を探る

今年度の本校の視覚障害教育部門の在籍数は、幼稚部13名、小学部17名、中学部23名の計53名です。小規模な学校ですが、子どもたちの障害の程度や状態は多様です。

視覚障害の程度は、全盲またはそれに近い状態で、普通の文字を読むことができない者が、幼稚部9名、小学部7名、中学部8名です。

知的障害を併せもち、文字が使えない者も多く、この中で点字を学習手段として常時使用しているのは、小学部2名、中学部8名です。

弱視者は、幼稚部4名、小学部10名、中学部15名で、普通の文字を学習手段として常時使用しているのは、小学部4名、中学部14名です。この中にも、ひらがなやカタカナ、小学校1、2年生程度の漢字の読み書きが中心であったり、視覚認知の障害のために文字の読み書きがスムーズに

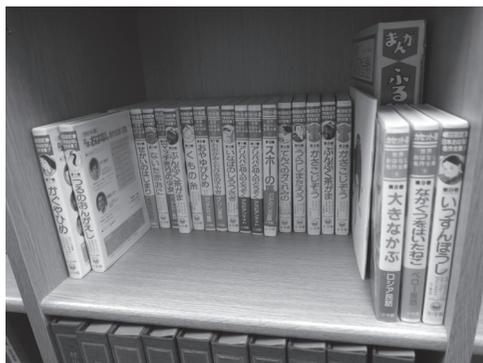
できなかつたり、漢字や拗音や促音などの日本語表記が苦手だったりなど、その実態はさまざまです。



弱視の子どもの読書を支援するための書見台や拡大読書器

視覚障害者のための録音図書といえば、少し前まではカセットテープに録音されたものでした。全盲の人たちの中でも、点字を読める人よりも、点字を読めない人や速いスピードで読めない人のほうが多く、点字図書館では点字図書よりも録音図書の利用のほうが圧倒的に多いです。

また、録音図書のほうが、点字図書よりも入手がはやく、種類も多く提供されるため、点字図書が読める人にも多く利用されています。



視覚特別支援学校図書館には、まだテープ図書がたくさん所蔵されている

DAISY図書はテープ図書に替わるものとしてとらえられることが多いのですが、子どもたちの多様な障害の実態に応じて、「図書」としてではなく、デジタル録音機の機能の利用も含めて、テープ図書にはなかった利点を活かした活用の広がりがあります。

今回は、従来の録音図書の、「全盲の人への音訳図書の提供」という役

割とは異なる活用の事例を報告したいと思います。

また、DAISY図書の利用を広げるための保護者への啓発活動についても触れてみたいと思います。

## 文字を読むのが困難で本が読み通せない生徒に

Aさんは中学部2年の生徒で、視力を使って普通文字を読むことができます。漢字を書くことが苦手です。語彙は広く、漢字を読むことはさほど苦手ではありませんが、「友好」を「こうゆう」と読むなど、熟語の漢字を逆にして読み書きしたり、似ている別の言葉に置き換えて読んでしまうこともあります。長い文章になると、言葉の切れ目がわかりづらく、おおよそ文意はとれているものの、スムーズに読みこなせないことがあります。また、拗音や促音、助詞の「は」「を」などの表記が苦手で、話すことは問題ないのですが、それを実際に書こうとすると迷ってしまうことがあります。

そんなAさんにとって、長い本を一人で読み通すことはなかなか難しいことです。夏休みに乙武洋匡さんの『だいじょうぶ3組』を選んで感想文を書いてきたとき、「最後まで読めませんでした」という前置きをしてから、印象に残った部分につい

て書いていました。

そこで、サピエ図書館で検索し、同じものをDAISY図書で借りて渡しました。Aさんは「DAISY図書」の存在を知らず、当然、再生機も持っていませんでした。伊藤忠記念財団より貸与されているプレクストークを貸し出し、自宅で聞いてみることにしました。



プレクストーク

文字で読むよりも、聞く方がわかりやすいとのことで、読み進めていきました。「しおり」の機能を使えば、テープ図書ではできなかった、印象に残った箇所に戻ってもう一度読み返すことも簡単です。

Aさんは、小学校の漢字から復習を始め、また、表記の練習もコツコツと積み重ね、少しずつ力をつけていますが、一方で、まとまった文章を読み、読書の楽しみを味わったり、さまざまな情報を得ることについては、「聴く読書」も活用していったほ

しいと思っています。

## 録音機能を活用して教材を作成

Bさんは中学部3年の全盲の生徒で、知的障害があります。中学部2年までは点字タイプライターを使っていましたが、今、点字盤に切り替えているところです。

盲学校で点字の読み書きを学習するときの練習の一つに、「聴写」というものがあります。音読される短い文章を聞いて、それを一定の時間内に正しく点字盤で書き取ります。

Bさんは点字盤でもだんだん正確に点字が書けるようになってきたので、聴写の練習も始めることにしました。

Bさんは音に対して敏感で、ピアノも上手です。好きな音へのこだわりも強く、パソコンやプレクストークを立ち上げる時の機械音や、機械の音声がしゃべる言葉も大好きなものの一つです。

そこで聴写の練習教材は、DAISY図書で作ることにしました。Bさんは聴写の練習が大好きになり、点字盤をセットし、録音の指示を聞きながら書き取る練習が、すぐに一人で行えるようになりました。

音楽CD形式でCDに保存すれば、再生機がない家庭でも普通に聞くことができるので、家庭での宿題にもす

る予定です。

点字の力を伸ばすことだけでなく、教員やお母さんの手助けなしに、一人で課題に取り組めるという点でも、BさんにはDAISY図書が有効でした。

聴写問題は1題が3分程度の短いものなので、見出しごとにとんでいければ十分です。階層を設ける必要はないため、作成もパソコンを使わずプレクストーク1台で短時間でできる点も便利だと思います。

## 録音して、その場で聞ける機能を活用

Cさんは、中学部3年の弱視の生徒です。よく話すのですが、声が非常に小さく、また、物事を整理して理解したり話したりすることが苦手で、発言は文の一部で終わってしまうことがよくあります。

高校入試も近づき、Cさんには、「相手に伝えよう」という気持ちをもって意識して話してほしいと思い、録音して自分の声を聞いてもらいました。録音はICレコーダーなどでもできるのですが、プレクストークはスピーカーも内蔵しているため、録音したものをその場でちょうどよいボリュームですぐに聞くことができます。

自分の話し方を聞いたCさんは、「声小さっ!」「滑舌悪い!」と苦笑

いをしていました。再びプレクストークを向けると、今度は意識して大きな声を出し、「どうだった?」と聞いてきました。少し考えながら言い直す場面もありましたが、整理して相手に伝えようという意識をもつと、格段にわかりやすい話し方になりました。日常生活の中での話し方は、急に改善されるものではありませんが、自分の話し方を聞くことで、自分の癖を直そうという意識をもって話すことを繰り返し練習させていきたいと思います。今は高校入試の面接に向けて受け答えの練習を重ねています。

録音した自分の声をその場で聞く方法は、発語が少なく、絵カードやパソコンの画面を見ることのできない全盲の生徒の意欲を引き出すことにも役立つように思います。

## 学校図書館という場を活かして、教員・保護者への啓発を図る

視覚障害がある子どもたちにとって、DAISYやマルチメディアDAISY図書は、読書の楽しみを味わう上で、非常に有効な媒体です。多くの点字図書館では、テープからDAISYへの切り替えが終わり、視覚障害者の世界には、DAISY規格はすっかり定着しています。

しかし、本校ではDAISY、マルチ

メディアDAISY図書ともに、まだ十分に活用されているとはいえない状態です。その理由はいくつか考えられますが、一つの要因として、普通科の教員の間に浸透していないことが挙げられます。教員への伝達は、朝礼や学部会などで行っていますが、実際に機器を使用し実習するまでには及んでおらず、操作が複雑であるというイメージを持った教員が多いのが実情です。また、学校図書館に常駐の司書が配置されておらず、貸出や利用指導、蔵書製作などの環境が整っていないことも大きな課題となっています。

このような中で、DAISYやマルチ

メディアDAISY図書の利用を広げていくには、何より学校図書館が人と資料を結ぶ仲立ちとなることが大切です。子どもたちや教員だけではなく、保護者にもその便利さや有効性を実感してもらうための取り組みも必要です。具体的には教員、保護者を対象としたDAISY、マルチメディアDAISYの体験講座の実施や機器の貸出しなどが考えられます。

視覚障害がある子どもたちが、豊かな読書経験を積むために、「わいわい文庫」や「サピエ図書館」を有効に活用し、子どもたちへ「読むこと」「知ること」の喜びを伝えていくことが図書館の大きな役割です。

